

◆湯浅常山「雨夜燈 常山紀談附録 完」(巻島所蔵)

※一頁

秋雨の夜半に寒燈を剪て古き物語を書集めぬれば是
なん雨夜の燈といふべき

○権現様、豊臣太閤に御對面の時、太閤我所持の道具粟田口
吉光の銘の物よりはじめて天下の宝といふものハ集りて候
とて指を折、数へ立申され、さて御所持の道具、秘蔵の宝物
ハ何にて候哉と尋ね申され候にしかくの物無御座由

権現様仰られ候、さて仰られ候にハ我等にハ左様の物無之候
但し、我等を至極大切に思ひ、入火の中、水の中へも飛入り命を
塵芥とも存ぜぬ士五百騎所持いたし候、此ノ士五百餘を召連
候へバ日本六十餘州恐しき敵ハ無御座候故、此ノ士どもを至極の
宝物と存シ、平生秘蔵に存候由、御答ありければ太閤赤面にて
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※二頁

返答なかりけり

○権現様駿府に御隠居遊され、大御所様と申奉る
台徳院様江戸より駿府へ御出なされ、二の丸に二ヶ月餘御滞
留なされ候節、 権現様阿茶の局を召て、將軍にハ年若き
人なり、旅住居二ヶ月になりぬ、夜中徒然なるべし、花を使に
して菓子をもたせ、裏道より忍びやかにやれ、もし慰にも
成ぬべきなり、我云たると聞れなバ隔心あるべし、汝が心得に
能はからへと仰られければ阿茶の局御心の付たる上意なり
と御請して花其比十八歳女中第一の美人なりしを殊に取
繕はせ、下女に菓子をもたせ、初夜の比裏道より密に参ら
せけり、内々阿茶の局よりかくと申ければ、 台徳院様御
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※三頁

上下をめし待せ給ふ處に花参りて御庭の戸をおとづれけれ
ば、 台徳院様御自身戸を明られ、花を上座に直し菓子を
御取、是ハ 大御所様より下されたるなるべしとて御いた
だきなされ、花早々帰られ候へと仰られ先に御立なされ戸
口まで御送りなされければ、花兼てたくみしと違ひていら
への詞もなく、歸りてかやうくなりと申ければ、 権現様

聞し召、將軍ハ律儀第一の人なり、我はしごをかけても及
がたしとぞ上意ありける

○三河国箕形原の合戦に 権現様御負なされ、濱松をさ
して御人数崩れ候時、甲州の士大将秋山伯耆下知して黒
鹿毛の馬に乗て鎗をバもたず、再拜を腰にさし度々取て

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※四頁

て頭書の補注を加へ刊布せられたれハ武家故実要用の重宝といふべし

常山紀談 備前湯浅元禎先生輯 初輯ヨリ五輯迄

全二十五冊

此書ハ常山先生の隨筆にて上應仁文明より下元和寛永の比まで戦國の
將士鬭争に周旋したる事どもを主と記して史書を編べき料にせられたる
遺稿なれば事実の正しきはいふも更にて乱世の光景を伺ひ観るべき物
此■（尺に日の字）の右に出るハなし、誠に武家必用の珍書なり

雨夜燈 右同作 全一冊

此書ハ當 大將軍家御治世の初より明君良臣の言行の道に叶ひ
て有難かりし事どもを輯めて治世の龜鑑とせられたる書なるを
此度常山紀談刊行の序に上梓して普く世に施したる也

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※五頁

江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛

同浅草茅町二丁目 須原屋伊八

同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

同全所 小林新兵衛

發行 同芝神明前 岡田屋嘉七

同本石町十軒店 英大助

同下谷車阪町 和泉屋庄治郎

書肆 備前岡山 片上屋孫兵衛

同 全所 中嶋屋益吉

備中倉敷 太田屋六藏

京都寺町三條通 丸屋善兵衛

大阪心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門